

「古い指輪」における作中人物の「伝説」への反応—賞賛と不満の真意

藤沢 徹也

I

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の「古い指輪」(“The Ancient Ring”) は、1843年に『サージェンツ・ニュー・マンズリー・マガジン』(*Sargent's New Monthly Magazine of Literature, Fashion, and Fine Arts*)の2月号に実名で収録された。新婚の妻、ソファイア (Sophia) と旧牧師館に引っ越してきた最初期に発表された作品である。この作品はホーソーンの生前には再録されず、1879年にソファイアによって、『ドリバー・ロマンスと他の作品』(*The Dolliver Romance and Other Pieces*)に入れられた。全集であるセンテナリーエディションでは、第XI巻の『雪人形と未収録の物語』(*The Snow-Image and Uncollected Tales*)に納められている。

この作品はほとんど論じられてこなかった。作中人物のモデルとなった人物を考察したり、イギリスに関する歴史書をいかに利用したか指摘したり、国内ではこの作品を元にして、ホーソーンのアレゴリーとシンボルを論じたものがあるが、いずれも研究ノートの短いものである。この作品の内容について論じた論文は皆無に等しい。その要因のひとつとして、物語の多くを占める指輪に関する物語の中の物語である「伝説」は、ジェームズ・K・フォルサム (James K. Folsom) が言うように、「相当につまらない伝説」(rather jejune legend) (79) であることに間違いはなく、失敗作と考えられているであろう。

本稿では、作中人物が書いた「伝説」はたいした内容ではないことをまず確認する。そして、それを聞いた聴衆の激賞や不満に、ホーソーンの話者への失望と期待が隠されていることを論じたい。

II

エドワード・キャリル (Edward Caryl) が婚約者のクララ・ペンバートン (Clara Pemberton) に指輪を渡すと、彼女がその指輪に関する伝説を作って欲しいとお願いする。それが「伝説」という物語の中の物語になっている。エドワードはクライアントがあまり多くない法律家ではあるが、「アメリカ文学発展のための助力のために」(XI 339) 文学作品も書いている。著名な編集者のブライアント (Bryant)、グリズワルド (Griswold)、ヒラルド (Hillard)、ティックナー (Ticknor) などに評価されており、「いくぶん文学において実戦経験のない者 (a carpet knight)」(XI 339-40) ではあるが、新進気鋭のひとりである。

「伝説」は次のように大きく3つのパートに分かれる。①17世紀初頭のエリザベス1世の時代の話、②17、18世紀の指輪のその後のゆくえ、③ホーソーンと同時代のニューイングランドでの献金の話。エドワードの「伝説」に対して、聴衆は「独創的」(original)、

「真実味がある」(nature)、「素晴らしい想像力」(what imagination) (XI 332) といった言葉で激賞するが、①エリザベス 1 世の時代についてどのくらいそうであるのか考察したい。アーリン・ターナー (Arlin Turer) によれば、ニューイングランド植民地の歴史以外で、歴史的な事件や人物を扱ったのは、「古い指輪」だけである (553)。17 世紀初頭のイギリスが舞台になっているのには 2 つの要因が考えられる。ひとつは、エドワードは、「魔法に掛けられたような素敵な (enchanted) 指輪は、古いイギリスの詩の中で輝くことが多い」(XI 340) と言っており、彼の頭の中に昔のイギリスがあったこと。もうひとつは、作者ホーソンにとって、創作のよい場を得ることができるからである。『大理石の牧神』(*The Marble Faun*) の序文で、歴史の浅いアメリカを材料にロマンスを書くのは大変だが、イタリアは「詩的で幻想めいた空間を提供してくれる」(IV 3) と書いているように、古い歴史の舞台を題材に物語を書くことができる。確かに、テキスト中で「伝説」を書いたのはエドワードであるが、彼にそれを書かせたのは作者ホーソンである。本稿では、後者に焦点を当てて論を進めたい。

この部分のストーリーは以下の通りである。

エセックス伯爵 (the Earl of Essex) がエリザベス女王 (Queen Elizabeth) への反逆者としてロンドン塔に捕らえられ、翌日の死刑が確定している。そこに、シュルーズベリー伯爵夫人 (the Countess of Shrewsbury) が訪ねてきて、彼の持っている指輪について尋ねる。その指輪は、以前女王からもらったものであり、どんな罪でも、その指輪を持って来たら許すというものであった。それはかつてマーリン (Merlin) のもので、彼の魔法で悪霊が住んでおり、指輪が愛と貞節の印である限り、贈った方にも贈られた方にも幸せをもたらすが、愛が偽りとわかり貞節が破られたら、悪霊は悪をなすというものである。伯爵夫人は指輪を必ず女王に渡すと言って受け取るが、そうせずに伯爵は死刑になってしまう。後に、伯爵夫人はそのことを女王に告白し、叱責される。夫人が亡くなった際、指輪は彼女の胸の上で見つかるが、そこには赤い丸の跡がついていた。

まずは、どこまでが史実であるか確認したい。ローラ・バラード・ケネリー (Laura Ballard Kennelly) によると、シュルーズベリー伯爵夫人の女王への罪の告白のシーンは、オリバー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の『最古の時代からジョージ 2 世の死までのイングランドの歴史』(*The History of England from the Earliest Times to the Death of George II*) が参考にされている。ゴールドスミスは、18 世紀のアイルランド生まれの詩人、劇作家、小説家である。ケネリーは、その歴史書と「古い指輪」を比較して、同義語で言い換えをしながらもゴールドスミスの語順に従っていること、そして、出来事の順序、つまり、死にかけている伯爵夫人が女王を呼び、事実を告げ、そのことで女王の逆鱗に触れるという順序に従っていることを挙げている。さらに、ホーソン独自の脚色として、判断や評価する語、つまり dreadful guilt (恐ろしい罪)、wicked (邪悪な)、obdurate (冷酷非情な) を付け加え、エリザベス女王のイメージに関しては、ゴールドスミスのものは神が許す余地を残している英国国教会のようであるが、「古い指輪」

の方は、伯爵夫人を「墮落した魂の持ち主」のように扱い、殺そうともする、カルビン派の女王のようであると指摘している (24)。

The remaining events of this reign are not considerable enough to come into a picture, already crowded with great ones. With the death of her favourite Essex, all Elizabeth's pleasures seemed to expire; she afterwards went through the business of the state merely from habit, but her satisfactions were no more. She had fallen into a profound melancholy, which all the advantages of her high fortune, all the glories of her prosperous reign, were unable to remove. She had now found out the falsehood of the countess of Nottingham; who, on her deathbed, sent for the queen, and informed her of the fatal circumstance of the ring, which she had neglected to deliver. This information only served to awaken all that passion which the queen had vainly endeavoured to suppress. She shook the dying countess in her bed, crying out, "That God might pardon her, but she never would."  
(Goldsmith 310-11 下線筆者)

History records how foully the Countess of Shrewsbury betrayed the trust, which Essex, in his utmost need, confided to her. She kept the ring, and stood in the presence of Elizabeth, that night, without one attempt to soften her stern hereditary temper in behalf of the former favorite. The next day the earl's noble head rolled upon the scaffold. On her death-bed, tortured, at last, with a sense of the dreadful guilt which she had taken upon her soul, the wicked countess sent for Elizabeth, revealed the story of the ring, and besought forgiveness for her treachery. But the queen, still obdurate, even while remorse for past obduracy was tugging at her heart-strings, shook the dying woman in her bed, as if struggling with death for the privilege of wreaking her revenge and spite. The spirit of the countess passed away, to undergo the justice, or receive the mercy, of a higher tribunal; and tradition says, that the fatal ring was found upon her breast, where it had imprinted a dark red circle, resembling the effect of the intensest heat. The attendants, who prepared the body for burial, shuddered, whispering one to another, that the ring must have derived its heat from the glow of infernal fire. They left it on her breast, in the coffin, and it went with that guilty woman to the tomb. (XI 347 下線筆者)

ケネリーはこれ以上のことは言及していないので、ホーゾンによるこれらの変更の意図について考えてみたい。それは、夫人の指輪をだまし取った行為がいかに非道であるか強調し、女王に激しく叱責されて当然であることを明確にするためだと思われる。つまり、夫人は「邪悪な」性格で、その行為は「恐ろしい罪」であり、「裏切り」である

と烙印を押すためである。女王の激怒はその夫人の行為がいかに邪悪なものであるか強調するために描かれている。史実では女王は処刑後かなり落ち込んでおり、ゴールドスミスの本でも夫人の告白に女王が激怒したのは、「押さえ込もうとしてもうまくいかなかった全ての感情」を呼び起こしたからとなっている。一方、「古い指輪」では、「過去の非情な行い」(past obduracy)、つまり、エセックス伯爵の死刑に同意したことに自責の念を抱くよりも、復讐や恨みを晴らすことに終始している姿を描いている。それゆえ、自分の心の思いを爆発させるのではなく、「冷酷非情」(obdurate)であるがゆえに、夫人の裏切り行為を激しく罰する姿が浮き上がってくる。これにより、夫人の裏切り行為はマーリンの魔法が発動されるに値する行為であったことが明確になり、最後夫人の胸の指輪の下に黒ずんだ赤い跡があったことにスムーズに接続される。

ここまでの変更点は、物語の輪郭をはっきりさせただけで、独創的と激賞するほどのことではないだろう。ケネリーが指摘する最大の変更点は、ノッティンガム伯爵夫人を、シュルーズベリー伯爵夫人に変更している点である。シュルーズベリー伯爵夫人は、エリザベス・タルボット (Elizabeth Talbot) という人で、エリザベス女王の亡くなる5年後の1608年に亡くなっているので、死の床で女王と会見するはずはない。ケネリーは、この変更を shrew がトガリネズミを意味すること、夫人はエセックス伯爵に恨みを持っていたことから、Shrewsbury という名前が邪悪で噛みついてくるようなげっ歯類、つまりネズミを連想させるからだと言っているが(24)、にわかには信じがたいので、後ほど再考したい。

指輪に関して、ゴールドスミスに見られる言及は、以前女王はエセックス伯爵に指輪を与えており、緊急の時はそれを彼女に届けることを望み、彼の安全と保護をもたらすものだということと、その指輪をノッティンガム伯爵夫人は女王に届けず、女王は激怒したということだけである。実はこの指輪の話については史実かどうかははっきりしないようだ。批評家で伝記作家のリットン・ストレイチー (Lyton Strachey) は、指輪の話は事実ではないと述べ、多くの歴史家も否定していることを紹介している。この話は実際に存在した感傷小説に由来し、敵方のノッティンガム伯爵夫人には、手違いで指輪が渡った(290-92)。たとえ、史実だったとしても、4巻本のゴールドスミスの本でさえ、ほんのわずかの記述しかない。他のイギリスの歴史書を何冊か確認したが、指輪に関する記述はなかった。ほとんどの読者がこの指輪にまつわる話を知らないことが前提となるので、ノッティンガムをシュルーズベリーに変えたところで大きな問題はないだろう。また、歴史に精通しているホーソーンは史実として疑いを持っていた可能性がある。というのは、指輪をだまし取ったのが、ノッティンガム伯爵夫人では史実として矛盾が生じ、都合が悪いからだ。彼女の夫は初代ノッティンガム伯爵であるチャールズ・ハワード (Charles Howard) であり、海軍卿としてスペインの無敵艦隊との戦いを指揮していたりするので、無名ではない。一般読者にそのことを知っている人が少ないとは言えないであろう。その伯爵はエセックス伯爵がクーデターを起こしたとき、女王の軍隊を率いて彼の屋敷を包囲して逮捕し、その裁判で審問委員を務め、敵対もしていた(石井 539)。それゆえ、エセックス伯爵がその妻に指輪を渡したところで、助命のために奔走してく

れるとは考えにくい。一方、シュルーズベリー伯爵夫人については知らない人がほとんどであろうし、その夫もスコットランド女王のスチュアート・メアリー (Stuart Mary) の監禁に携わったこと以外、歴史にはほとんど登場しないようだ。実在はしているけれど、実はよく知らない人物のほうが、物語を作るのに都合がよかったのであろう。

ここで、再度、Shrewsbury の名前から連想されることを考えてみたい。名前の連想から言えば shrews であることを bury、つまり「埋める」、「隠す」ということになる。shrews の音から、shrewd を連想することは難しくないであろう。ホーソンがこの言葉をどのような意味で使っているか確認してみたい。一番よく出てくるのが「僕の親戚、メイジャ・モリヌー」(“My Kinsman, Major Molineux”) で、ロビン (Robin) に対して「頭の回転がよい」という意味で繰り返し使われる。『七破風の屋敷』(The House of the Seven Gables) では、物語の中の物語である「アリス・ピンチョン」の中で、土地の権利書を探すために、マシュー・モール (Matthew Maul) の墓を暴かせた弁護士は、「狡猾な (shrewd) 弁護士」(II 196) と表現されている。「古い指輪」にも、指輪を見ているエセックス伯爵のところへ恨みを晴らすために来たシュルーズベリー伯爵夫人についてこの言葉が使われている。その伯爵夫人は、友達を装った狡猾で節操のない女性と説明され、その伯爵夫人の shrewd な観察により、エセックス伯爵の指輪に対する深い関心を見抜く。ここでの shrewd は「狡猾な」という墓を暴いた弁護士に対する意味で使われている。次に、bury についてだが、シュルーズベリー伯爵夫人が隠しているその狡猾さは見抜けないと言及されているところが 2 箇所ある (XI 343、345)。このように、Shrewsbury という名前は「狡猾さを隠している」という意味になり、この夫人をよく言い表しているのではないだろうか。

ここまでは、人間に起こりうる現実の世界の物語であるが、架空の世界への言及として、マーリンと彼が魔法で悪霊を住ませた指輪が挙げられる。それはチューダー王家の家宝で、女王自ら着けていたものをエセックス伯爵に渡している。マーリンとはアーサー王伝説に出てくる人物で、『アーサー王辞典』には、「アーサーのおかかえの魔術師にして相談役、実質的にアーサーの国の礎を築きあげた人」(244) とある。アーサー王伝説では、マーリンは魔法使いというよりか、王がどのように行動したらいいかアドバイスする賢者として描かれている。アーサー王伝説には様々な言い伝えがあるが、トマス・ブルフィンチ (Thomas Bulfinch) の『中世騎士物語』(The Age of Chivalry) を参考にしたい。その理由の一つ目は彼はホーソンと同時代のアメリカ人であること、二つ目は『アーサー王辞典』には、マーリンの最後について、愛人のヴィヴィアン (Vivian) に騙されて幽閉される話と、アーサー王の死に至る戦いに登場し、最後は気が触れ野人となって森に暮らしたという 2 つが紹介されているが (246)、ブルフィンチの書いたものは前者を採用し、「古い指輪」に近いからだ。

指輪に悪霊を住ませるのが、特にマーリンである必然性はないであろう。なぜ、ホーソンはマーリンを選んだのであろうか。それは、エセックス伯爵との共通点があるからだと考えられる。つまり、言葉巧みに女性に騙される点と、塔に幽閉される点である。「古い指輪」の中のマーリンは女性に殺されるので、裏切られるという点でブルフィン

チの話と共通する。アーサー王伝説では、マーリンの愛人のヴィヴィアンは、彼を永久に引きつけておく方法を思い巡らす。そして、いったんできると元には戻せない住処をマーリンに魔法で作ってもらい、そこでいっしょに暮らそうと誘う。さらに、その魔法は自分がかきたいと願い、マーリンに教えてもらう。ある日、ヴィヴィアンはマーリンが眠っているときにその魔法を使い、世界で一番頑丈な塔に閉じ込めてしまう。塔を元通りにする力はヴィヴィアンにしかないので、マーリンは外に出られなくなる。ホーソーンに関係するところでは、そのマーリンに魔法を掛けて裏切る場所が、white-thornの木陰であることだ。white-thornとはセイヨウサンザシ(English Hawthorne)のことで、ホーソーンを意味する。賢者マーリンでさえ騙されるこのエピソードは、ホーソーンの木から伸びた枝でできた木陰での出来事であり、故意に失敗作と呼ばれる作品を書くことなども含めて、物語の出来事は作者の手中にあることの象徴になるかもしれない。また、マーリンが仕えたアーサーも不義の生まれである。彼の父は他の騎士の妻を手に入れたいと思い、謀反の疑いを掛けて抹殺したうえで、その妻を手に入れる。その際、アーサーの父はその妻の夫の格好をして会いに行き、その妻はそれが自分の夫でないことを承知した上で交り、生まれたのがアーサーである。アーサーの父による人妻を自分の妻にしたいという依頼を受けて、それを仕組んだのがマーリンである。不義というキーワードで、マーリンはエセックス伯爵やシュルーズベリー伯爵夫人と繋がっている。

架空の世界の話でエリザベス1世の時代の話は終わる。「指輪は夫人の胸の上で見つかり、そこには黒ずんだ丸い跡があり、それは最も強烈な火で焼いたようであった」(XI 347)。島田太郎氏は、「この描写が『緋文字』のディムズデイルの胸にあったというAの文字の描写の原形であることは明白である」(64)と指摘している。『緋文字』ではAの文字は大きな役割を果たすが、「古い指輪」の丸い跡は特別な効果を上げていると言いがたい。女王がエセックス伯爵にその指輪の由来や特徴を話したとき、彼女はそれを「伝説」だと言い、エセックス伯爵は「ふざけるように」(playfully)に言ったと感じている。さらに、「マーリンは女性に殺されたので、指輪の効力(virtue)はすでにない」(XI 342)とも言っている。それを伯爵から聞いたシュルーズベリー伯爵夫人も馬鹿げた(idle)伝説だと答えている。つまり、3人の登場人物はだれも指輪の効力を信じていない。それなのにエドワードの聴衆は、貧しい人々からの献金により、指輪の呪いが解けたという流れに大きな疑問を抱かないようだ。つまり、物語の細部については考慮せず、貧しい人々からの精一杯の献金という美德の成就にしか目が向いていないと考えられる。

エリザベス女王と死の床にある伯爵夫人の会見の場面は「歴史が記録するところによると」と言い、亡くなった伯爵夫人の胸に赤い跡があるくんだり、は「伝説によると」と表現されている(XI 347)。歴史の事実である「現実の世界」と、マーリンの魔法の話である「架空の世界」を融合した「中間領域」を作りたかったのであろう。その後も、指輪を持った人が不運にあう話の要約が続き、献金で指輪は無色透明のダイヤモンドの色に戻ったようだというところで終わる。結局、マーリンの指輪は直接には何の役割も果たしていない。フォルサムは、エセックスの陰謀に関わる話は、ノベルの法則、つまり、日常世界や歴史的な事実の法則に忠実であり、マーリンと解き放たれた悪霊はロマンスの法則、つ

まり、人間の心の法則に忠実であるが、この 2 つはうまく結びついていないと論じている (80)。

エドワードの創造した部分とはいえば、シュルーズベリー伯爵夫人が指輪を言葉巧みに手に入れる話となるが、激賞するほどの内容ではないであろう。女王と伯爵夫人の会見のシーンを歴史的事実という扱いにし、伯爵夫人の名前を入れ替えたことも同様であり、マーリンの指輪も大きな役割を果していない。つまり、これを聞いた聴衆が激賞する要素を見つけることは難しい。

### III

舞台はホーソーンの同時代のニューイングランドのある教会に移る。そこでは、2 人の執事が献金集めをしている。一方のティルトン (Tilton) は貧しい人々 (労働者) を担当し、献金箱の中はコイン (銅貨) ばかりで、その額の少なさに嘆き、自ら 10 ドル寄付しようとするような、「素朴で思いやりのある」(XI 349) 人物である。もう一方のトロット (Trott) は上流階級の人が座っている 1 階席を担当し、献金箱の中は紙幣が中心だが、彼は貧しい人の少ない献金を見て、「人々は銅貨 2、3 枚で天国への入場券を手に入れるつもりなのだろうか」(XI 349) と言ったり、「献金を増やすには、献金箱の出し方しだい」(XI 349) と言ったり、すべて自分のポケットから献金されたものかのように誇っていたりして、いい印象を与える人物ではない。後から言及するが、美德をたたえる道德話の構造からすれば、いいことがあるとすれば、善良なティルトンの方であり、読者もそれを期待するはずだ。

現実的な話、チューダー王家に伝わるというエリザベス女王のダイヤの指輪が安いわけがない。貧しい人の手によってその指輪が献げられたということが不自然に思える。普通に考えると、指輪を差し出したのは、上流階級の人になるはずだ。また、貧しい人々が、少ないながらも精一杯の献金をしているわけではない。なぜなら、心優しいティルトンが献金箱の寄付額を見て「きっと悪魔 (the Evil One) がこの箱の中にいるんだ」(XI 351) と嘆いているからである。献金箱には偽札が入っていたりしており、貧しいながらもあらん限りの献金をしていたら、そうは言わないはずだ。上流階級に対しては、ほとんどの献金は「サイフの中で最も少額のもの」(XI 350) と言及されているが、貧しい人々においても同様であろう。つまり、この教会に集まる人々は必要以上に献金に力を入れているわけではなく、高額な献金が普段からなされている環境ではないと考えられる。

それでも、そのような状況で、貧しい人たちのグループから、高価な指輪が寄付されたことを聴衆が受け入れるのはなぜだろうか。行動経済学のプロスペクト理論 (確率加重関数) では、確率が低いものは実際以上にあり得ると思ってしまう傾向が報告されている。例えば、宝くじに当たる確率は非常に低いが、多くの人が買うのは実際より当たる確率を高く見積もることに起因する。同様のことが、貧しいグループからの高額な寄付にも当てはまるであろう。しかし、これは現実の話であればのことで、ある出来事が実際に起こってしまったのなら、それを否定できない。アリストテレスが『詩学』の

第9章で述べているように、フィクションには、現実の出来事よりも本当らしさが求められる。貧しい集団の中から、エリザベス女王が着けていたような指輪が寄付されるとは普通考えにくいにもかかわらず、聴衆がそれを受け入れるとなると、美德をたたえる道徳話として受容していることが考えられる。フォルサムも「一種の教訓話(exemplum)だと思う」と述べている(79)。また、宗教的には、貧しい人が精一杯の献金をすることは素晴らしいことだという「マルコによる福音書 第12章41節~44節」も一役買っているであろう。

「指輪の中の悪霊を、目を引かない善意の行為で振り払い、いまでは、貞淑でひたむきな愛の象徴となった」(XI 352)と物語のモラルは、はっきりと書かれている。このように、モラルも明確に述べられ、指輪も邪悪なものから婚約者に渡す指輪としてふさわしいものとなり、ハッピーエンドで終わる。つまり、何の変哲もないハッピーエンドで終わる道徳話で幕を閉じたことになる。道徳を前面に出すのであれば、ハッピーエンドでないほうが効果的であるように思える。例えば、怖がられるより愛されたかと言って美女が死んでしまう「ラパチャーニの娘」(“Rappaccini’s Daughter”)が1844年、自分の作った薬で妻を死なせてしまう「痣」(“The Birth-mark”)が1843年と、「古い指輪」と同時期に発表されている。道徳はこの2作品の方がより読者に届くはずだし、ホーゾーンの代表作ともなっている。ハッピーエンドで終わらない効果は、行動経済学の損失効果で説明できる。人間は得をすることより、損をすることにより敏感になる。例えば、ワクチン接種率を上げようと思ったら、ワクチンを打ったらコロナになりませんよ!というより、ワクチンを打たなければコロナに感染しますよ(損をしますよ)と言った方が効果的だ。しかし、ごく平凡なハッピーエンドの物語に聴衆は大絶賛する。

文学作品に対して、褒め言葉を羅列するシーンが『七破風の屋敷』の中にもある。それと比較して見えてくることを考察したい。文筆活動もしているホールグレイブ(Holgrave)が、いとこで後の婚約者のフィービー(Phoebe)に「伝説」という物語を語る。第13章「アリス・ピンチョン」がそれにあたり、彼の一族の過去の事件や言い伝えを元にした、雑誌に発表する予定の創作作品である。その中で、マシュー・モール(Matthew Maule)は催眠術で隷属状態にしていたアリス(Alice)を、自分の結婚式に呼んでかきかせる。その後、アリスは隷属状態から放たれるが、亡くなってしまう。ホールグレイブは物語を語り終えると、自分の手振りでフィービーが催眠にかかっていたことに気づく。その催眠を解いた後に、あまり内容を覚えていないという彼女に向かって、いかに優れた作品であるかを強調するために、文学作品に使うことのできる、思いつく限りの褒め言葉を羅列する。

“You [Phoebe] really mortify me [Holgrave], my dear Miss Phoebe!” he exclaimed, smiling half-sarcastically at her. “My poor story, it is but too evident, will never do for Godey or Graham! Only think of your falling asleep, at what I hoped the newspaper critics would pronounce a most brilliant, powerful, imaginative, pathetic, and original winding up! Well; the manuscript must serve to light lamps with;—if, indeed, being so imbued with my gentle dulness, it is any

longer capable of flame!” (II 212 下線筆者)

ここで、「古い指輪」の聴衆の褒め言葉と比較すると、双方の引用の下線部のように、多くが同じような言葉を使用している。

“Very pretty!—Beautiful!—How original!—How sweetly written!—What nature!—What imagination!—What power!—What pathos!—What exquisite humor!”—were the exclamations of Edward Caryl’s kind and generous auditors, at the conclusion of the legend. (XI 352 下線筆者)

最後に述べられる、exquisite humor (極めて効果的なユーモア) に関して、exquisite とまで言えるユーモアは思い当たらないであろう。褒め言葉がなくなったので、作品の内容とは関係なくとにかく付け加えたとしか思えない。ここで、浮かび上がってくるのが、よくある道徳話に満足し、何の変哲もない物語に対し、とにかく出来合いの褒め言葉を並べる聴衆の姿と言えるであろう。「親切で寛大な聴衆」(kind and generous auditors) を通り越して、物語に真摯に向き合わない残念な読者の姿である。そんな中、クララは「あなたのモラルは私を満足させないの。指輪でどんな考えを具体的に示そうとしたの？」(XI 352) と不満をこぼす。

ここで、クララのこの発言について考えるために、ある作品を参考にしてみたい。フレデリック・ブルース・オルセン (Frederick Bruce Olsen) が指摘しているように、1834年のギフトブックである、「トークン」(*The Token and Atlantic Souvenir, A Christmas and New Year’s Present*) の中の作品にほぼ同じ趣旨のことが書かれている。その作品は匿名の著者による、「肺結核」(“Consumption”) という題名のものである。ストーリーを簡潔に紹介すると次のようになる。ある恋人が遠距離恋愛をするが、男性が心変わりをする。女性はそのうち結核にかかり、医者からも治らないと言われるが、男性が心を入れ替え戻ってきて、女性に付き添うと結核が治り、2人は幸せに暮らした。物語はここで終わらず、作者と同時代の立派な人というのが出てきて、内容について不平を述べるのだが、これがクララの発言と酷似している。

‘This is all very well,’ said a very respectable contemporary of my own, after reading the above reminiscence, as he turned the manuscript over with his thumb and finger, looking suspiciously now at its back part, and now at its front; ‘this is all very well, sir, but what is the moral?’

‘Moral? sir,’ I returned; and I repeat my reply, lest any other meddler should ask the same question; ‘the moral is, that love is an infallible cure for consumption; and, sir, I consider the above history of a case successfully treated, as invaluable to all medical men, young lovers, and consumptive patients.’ (188-89 下線筆者)

「この話はとてもすばらしいんだけど、モラルは何なんだ？」と作品を褒めながらも、作品のモラルを求めている。この物語はよくあるセンチメンタルな話で、モラルも「愛が全てを解決する」とか「愛し続けることの大切さ」などを明確に思い浮かべることができる。この不平を言った人はページを繰ってモラルを探しているのだから、それが書かれていることを疑っていない。作品が伝えたいことを自分では考えようとせず、わかりやすく単純化したモラルの文言がないと作品を理解できない読者である。

一方、この作品の作者は「モラルだって？」と聞き返しているのだから、モラルを書くことを想定していないのは明らかだが、他の「いらぬ世話を焼く人」(meddler)と同じ質問をさせないために、「愛は結核の絶対的に正しい治療薬なのだ」とモラルを付け加える。特にクリスマスのためのギフトブックにも合うように、愛の大切さを強調したロマンティックな物語を書いているのに、それをモラルとして言い直すという愚行をしないといけない状況に、この作者の失望や怒りまでも感じる。というのは、その後、医者、若い恋人、肺結核にかかった患者すべての人に非常に貴重なものとしてうまく書いているとさらに具体的に述べて念押しをしているからだ。クララがさらなるモラルを求めた際に、エドワードが気が乗らないまでも、それに応じた状況とも共通する。「心からお願いしたいのだけど、これで十分だということにしてくれないかな」(XI 352)という言葉に、彼の複雑な気持ちを感じ取れる。

ホーソーンは「トークン」に多くの作品を発表している。1831年から1837年に関しては、『ストーリー・テラー』(*The Story-Teller*)という作品集に載せるために原稿を取っておいた1834年を除いて、毎年作品を掲載している。それゆえ、彼が「肺結核」を読んでいたことは十分考えられる。それから10年近く経ってもその存在を忘れていなかったのは、読者に妥協しないといけない痛々しい姿が自分自身の姿とオーバーラップし、頭から常に離れなかったからであろう。

このように、エドワードの「伝説」にギフトブックの「肺結核」が重なり合うと、作者ホーソーンの意図が少し見えてくる。つまり、モラルを聞かれるという行為が、エドワードの書いた「伝説」はギフトブックレベルのものであること、そして、クララはその程度の「いらぬ世話を焼く人」であることを表すことになる。実際に、クララのモラルを求めた発言に深い意味があったかといえばそうではないようだ。彼女は、婚約者としての「自分の褒め言葉は他の人のものに比べて大きく違うので、他の人のようには褒めてはいけない」(XI 352)と感じたので、あえて発言してみただけで、「肺結核」の著者が想定していた、いらぬ世話を焼いただけだと言える。

クララの要求に応じてエドワードは、「指輪は人間の心で、悪霊は欺瞞だと言えるかもしれない」(XI 352)と答えるが、島田氏は「この最後の部分は、我々今日の読者から見ればまさに蛇足であり、全体の効果を打ち壊し、古雅愛すべき一篇の伝説物語を、アレゴリーの次元にまで引き下げているように思える」(64)と述べている。エドワードのこの言葉は、彼の作品中でうまく具現化されておらず、ギフトブックよりさらにレベルの低いものになってしまったと言っているのではないだろうか。クララはそれ以上追求せず、「世界がこの物語について、なんと言おうとも、その物語を評価する」(XI 352)と

激賞して終わる。やはり、クララのさらなるモラルを求めた発言には、深い意味がなかったことがわかる。

#### IV

先ほど取り上げた、ホールグレイブの書いた「アリス・ピンチョン」に関して、ジェーン・ベナルデーテ (Jane Benardete) は、女性のための雑誌である「ゴードィーズ」 (*Godey's Lady's Book*) が要求することに合わせて書かれていると論じている。そうすることで、ホーソーンは、雑誌用の軽い話を作れること、表面的な作品とそうでないものを分けることができることを示し、そして、同時代のアメリカのフィクションの最も一般的な取るに足りない、センチメンタルな様式への軽蔑を示唆している (233)。

一方、「古い指輪」の「伝説」への作中人物の反応は、作者ホーソーンの軽蔑とはいかないまでも、読者への失望を表していると考えられる。聴衆はハッピーエンドでわかりやすいモラルを含んだ物語というだけで、定型のありふれた褒め言葉で激賞する。聴衆のそのような姿を描くために、ホーソーンは作者のエドワードがまだ「いくぶん文学において実戦経験のない騎士」(XI 339) だということにして、つたない「伝説」物語をあえて書いたと思われる。クララは作者が書くのを嫌がるさらなるモラルを深い意味もなく尋ね、作者はそれに渋々応じざるをえず、不完全にしか答えることができなかつたにもかかわらず、彼女は激賞をする。ホーソーンはそんな読者の要求に応え続けなくてはいけない文学市場をよく思っていないが、エドワードのクララとの結婚は、そのような読者と運命を共にするという覚悟も含まれている。それから約 20 年後の最後の完成したロマンスである『大理石の牧神』では、序文で「理想の読者」というものに会ったことはないが、そういう読者がいることを信じ、その読者のために書き続けてきたと述べている。しかし、謎めいたところをもっとはっきりさせてほしいという読者の要望に応じて「後記」が付けられる。気が進まないまでも、謎とされるところのいくらかは答えるが、肝心のところは答えるのを拒否して終わってしまう。読者の要求に応えることをやめた、ここが、「理想の読者」をあきらめた瞬間なのかもしれない。

作家としての名声もないまま結婚生活を始めた頃に行った「古い指輪」での、聴衆の賞賛もクララの不満もホーソーンの読者に対する失意を表している。ここで注目したいことは、クララにさらなるモラルを求められたとき、「半分とがめるような笑み」(a half-reproachful smile) を浮かべていることだ。言い換えれば、この時期のホーソーンは、読者にまだ半分は期待していたのであろう。

\*本稿は、日本ナサニエル・ホーソー協会 関西支部研究会 8月例会 (2021年8月21日: Zoom) で『古い指輪』における作中人物の枠物語への反応—「伝説」への賞賛と不満の真意—という題で行った発表を加筆・修正したものである。

Works Cited

- Anonymous. "Consumption" *The Token and Atlantic Souvenir: a Christmas and New Year's Present*. 1834. 175-189.
- Benardete, Jane. "Holgrave's Legend of Alice Pyncheon as a *Godey's* Story." *Study in American Fiction*, Vol.7, No.2 (Autumn., 1979), 229-233.
- Bulfinch, Thomas. *The Age of Chivalry*. Kindle edition, 2012. ※ 初版は1858年。
- Folsom, James K. *Man's Accidents and God's Purpose*. College and University Press, 1963.
- Goldsmith, Oliver. *The History of England from the Earliest Times to the Death of George II*. Vol. 2. printed for T. Davies; Becket and De Hondt; and T. Cadell, 1771.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962 - 97. (ホーソーンのテキストに言及するときはこの全集による。引用の際には巻数とページ数を明示する。)  
※「古い指輪」の訳は、国重純二、『ナサニエル・ホーソーン短編全集 III』南雲堂、2015、を参考に自由に変更させていただいた。
- Kennelly, Laura Ballard. "Goldsmith's History in 'The Antique Ring'." *Nathaniel Hawthorne Review*, Vol.15, No.1 (Spring., 1989), 24-25.
- McDonald, John J. "Longfellow in Hawthorne's 'The Antique Ring'." *The New England Quarterly*, Vol. 46, No.4 (Dec., 1973), 622-26.
- Olsen, Frederick. "Hawthorne's Integration of Methods and Materials." Diss. Indiana University, 1960.
- Turner, Arlin. "Hawthorne's Literary Borrowings" *PMLA*, Vol. 51, No. 2 (June., 1936), 543-62.
- アリストテレース 『アリストテレース 詩学 ホラーティウス 詩論』 松本仁助・岡道男 訳 岩波文庫、1997。
- 石井 美樹子 『エリザベス—華麗なる孤独』 中央公論新社、2009。
- コグラン、ローナン 『図説アーサー王伝説事典』 山本史郎 訳 原書房、1996。
- 島田 太郎 「古い指輪」を手掛りに 『一橋論叢』 73(1), 1975、63-68。
- ストレイチー、リットン 『エリザベスとエセックス—王冠と恋』 福田逸 訳 中央公論新社、1987。